

1 安曇川流域の水利施設

○安曇川流域の昔の水利状況

◆水の豊かな上中流部

朽木村（現高島市）の水利

安曇川は、京都市北部の大原・鞍馬付近を源流とする、延長約58km、流域面積約306km²の湖西最大の河川です。安曇川の流れは、比良山地西側の山中を貫く鯖街道沿いを北上して、朽木村を縦断します。朽木は平野部に比べて田や畑の面積が狭く、少しでも米の収量を増やせるよう、川筋から谷筋に向かって耕地を広げてきました。しかし、川沿いの集落や田畑は、川が氾濫するたびに大きな被害を受けてきました。

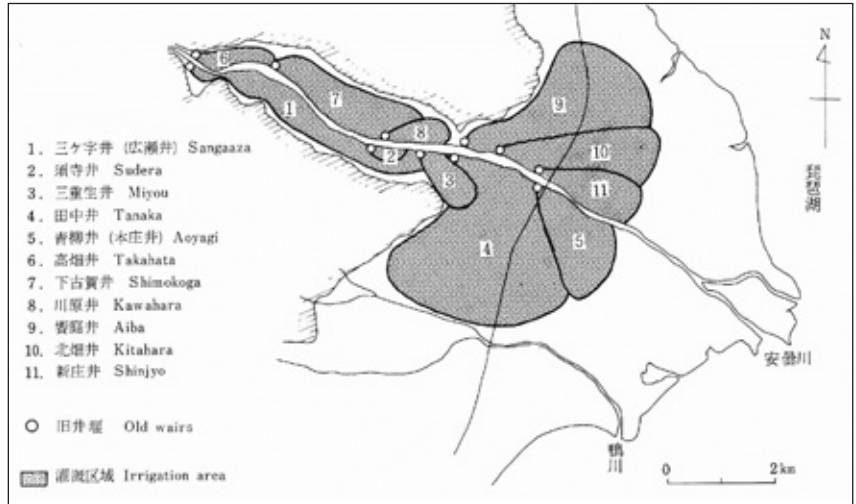
安曇川中流の水利

朽木村の市街地付近に差し掛かると、安曇川は東へと向きを変え、琵琶湖に向かいます。饗庭野、泰山寺野の両洪積台地に挟まれたこの地域の水田は、本流に沿って細長く分布しています。

安曇川合同井堰ができる前は、比較的小規模な6つの井堰から、潤沢な安曇川の用水を取水していました。水が引きやすく排水も良好なこの土地では、古来より人が住みついて農耕生活を営み、条里制の施行によって、徐々に下流のデルタ地帯へと水田、井堰の開発が進んでいった、と考えられています。



▲田中井用水にかかる水論裁判状部分【『安曇川町史』より転載】



▲安曇川の旧井堰【『滋賀県の自然』舟橋和夫「安曇川デルタにおける水と村—水利組織を中心として—」より転載】

◆デルタ地帯の水不足と湧水

扇頂部と扇中部の水利

台地に挟まれた中流域を抜けると、安曇川は円弧状の扇状地を形成し、デルタに到達します。合同井堰完成前は、主に5つの井堰が、JR湖西線より山側の扇頂部～扇中部に設置されました。そのうち扇頂部に位置する右岸の田中井、左岸の饗庭井、北畑井は、比較的容易に安曇川本流から水を引くことができました。

しかし、扇中部の右岸側青柳井、左岸側新庄井付近では、河川水が伏流するため、水不足に悩まされてきました。本流からの取水と上流からの余水を組み合わせ、かんがいを行わざるを得ませんでした。

18世紀、この地域では水利をめぐる争いが多発しています。右岸側で

は、上下の井組間で80年間にわたる水論が発生しました。下流の青柳井（本庄井）の2ヶ村は、上流の田中井の末端に接していました。下流の青柳井で水不足が発生したときに、上流の田中井から取水する水利権を主張して訴訟を起こしました。青柳井の2ヶ村は、もともと田中井に所属していたと主張しましたが、田中井の普請を負担していないなどとして退けられ、敗訴となりました。

下流平坦部の水利

最下流に位置するデルタの平坦部では、生水（しょうず）と呼ばれる豊富な湧水が安定して用水を供給しており、安曇川から直接取水する井堰はありません。

かんがい期には、各水路の出口を閉じて、湧水や上流の排水を貯めることで、かんがいを行っていたようです。この地域は水不足には困りませんでした。湖水面の上昇による浸水や排水不良といった問題を抱えていました。

(参考)

野間晴雄 (2009) 「低地の歴史生態システム：日本の比較稲作社会論」 p.266-267, 276, 287, 関西大学出版部
安曇川町史編集委員会 (1984) 『安曇川町史』 p.36-46, 612-615, 安曇川町

○近現代の水利整備

◆安曇川合同井堰

昭和24年7月に近畿地方を襲ったヘスター台風時の鉄砲水により、安曇川沿岸の2,531haをかんがいする10井堰が流失しました。

これをきっかけに、水利の合理化を図るため、昭和25年に県営災害復旧事業で各堰を統合し、恒久的なコンクリート合同井堰とする工事に着手し、約19kmの幹線水路の整備とあわせて、昭和37年度に完成しました。頭首工で安曇川本流から左岸側に一旦取水し、その下流150mで逆サイホンによって安曇川を横断し、右岸側幹線水路へ分水しています。

この合同井堰の完成により、それまで水不足で苦しんでいた青柳井や新庄井のかんがい域は干ばつから解放され、他地域においても、洪水時の井堰流出への負担が取り除かれました。



▲安曇川分水路（高島市）
【提供：安曇川沿岸土地改良区】



▲安曇川合同井堰（高島市）【提供：滋賀県】

◆長い歴史を持つ取水水門

左岸側の饗庭井は、江戸初期に起源を持つといわれていますが、何度も埋没、破壊、補修を繰り返してきました。

湖西地域の扉絵にある饗庭井取水水門は、明治38年に現在の石造水門に改築されました。4,680mの水路は、昭和37年に現在のコンクリート水路に改修され、現在も饗庭井かんがい域への導水を担っています。



▲饗庭井取水水門（高島市）
【提供：安曇川沿岸土地改良区】

◆琵琶湖揚水

安曇川デルタの下流平坦部の用水は、安曇川からの用水と、安曇川伏流水や湧水を水源とする小河川に依存していました。しかし、ほ場整備に伴う用水量の増加と、琵琶湖総合開発による琵琶湖の水位低下に伴う用水不足が懸念されました。

そこで、琵琶湖総合開発による農業用水補償により、琵琶湖からの揚水かんがいが導入されることとなり、各地区にポンプ場や送水管が設置されました。現在も、デルタ地域一帯の約900haにおいて、非常渇水時の水源として、湖水による安定した用水補給がなされています。

(参考)

- 琵琶湖流域研究会編（2003）『琵琶湖流域を読む 上—多様な河川世界へのガイドブック—』p.43-49, サンライズ出版
- 安曇川町史編集委員会（1984）『安曇川町史』p.1024-1026, 安曇川町
- 新旭町誌編さん委員会（1985）『新旭町誌』p.743-747, 新旭町
- 滋賀県教育委員会事務局編（2000）『滋賀県の近代化遺産—滋賀県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書—』p.34-35, 滋賀県教育委員会事務局
- 滋賀県史編さん委員会編（1976）『滋賀県史 昭和編 第3巻 農林編』p.202-203, 滋賀県
- 農林水産省近畿農政局淀川水系農業水利調査事務所編（1983）『淀川農業水利史』p.300-301, 農業土木学会



▲安曇川農業水利事業概要図 [『淀川農業水利史』より転載]

コラム

安曇海人族の伝説

◆安曇川流域に残る 海人族の史跡

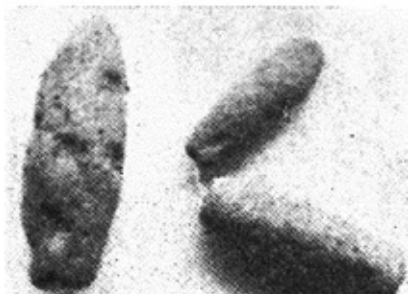
新旭町（現高島市）の太田地区に、大將軍塚と呼ばれる碑があります。これは、7世紀の中期に朝鮮半島の百済との外交にあたった將軍 安曇比羅夫の墓と伝えられています。661年に百済が唐と新羅の連合軍に攻められて窮地に陥った時、安曇將軍が救援のために軍を率いて朝鮮へ向かいましたが、663年の白村江の戦いで敗れ去ったといわれています。

高島郡誌によると、明治以前は大田神社の境内に六所舟魂大明神社があり、安曇連の祖神で海や川の守護神を祀っていたことから、一帯は安曇連の領地であったといわれています。

さらに、太田地区には蒲生の薬師という安曇氏の氏寺が明治9年まで存在していました。安曇將軍が百済救援の時に率いた軍船の帆柱を刻んだ



▲太田の大將軍塚【『新旭町誌』より転載】



▲天川付近より出土の土鍾
【『新旭町誌』より転載】

とされる仏像がありましたが、戦国時代に焼失したとされています。太田地区には、安曇氏ゆかりの史跡が数多く残っています。

◆阿曇氏の足跡

安曇氏は、海を渡って日本に移住してきた「漁民」の仲間であり、筑前国糟屋郡安曇郷を本拠とする海人を率いる豪族でした。

一族は、大和朝廷に仕え、天皇の御膳を奉仕する内膳職や外交職などの重要な地位にあったといわれています。一族の繁栄は全国に及び、三河国の渥美、美濃国の厚見、信濃国の安曇野、その他数多くの地に広がっていきました。

近江国においては、安曇海人族は越前国の敦賀、小浜を経て、安曇川流域に進出したとされています。安曇川流域付近を見ると、安曇氏、海人族との関係を見出すことのできる地名が多く残っています。

安曇川町（現高島市）の上古賀に、天川と呼ばれる小川が、饗庭野台地から流れ出ています。上古賀地区のほ場整備の折に実施された発掘調査によって、古墳時代から中世の遺構が多数、発見されました。その中で、網を沈めるための鍾として使

用する漁労用具の土鍾が3個見つかり、当時魚を獲っていた海人たちが由来となって天川と呼ばれたとも考えられています。小浜、若狭からやってきた古代の海人族は、この地で漁労を始め、農耕や鉄器が発達するにつれて、農耕適地を下流の肥沃地に求めて移動したのかもしれませんが、下流の太田地区に見られる安曇氏との関連が、それを暗示させます。

また、新旭町安井川付近の安曇川左岸沿いの川原には、安曇という地名が残っています。かつて、安曇川は曲折しており、安曇は現在の川の対岸となる右岸付近まで陸地が続く広がりをもった地域でした。安曇という地名をもつ地域は、現在は大半が川底に沈んでいますが、この地に定着した安曇氏が安曇川の由来であるとされています。

安曇氏は、6世紀頃を境として、近江国の古代史から姿を消したとされています。安曇氏の主力が、大和朝廷の群臣として大阪河内に移ったとする説、反対勢力による強制的退去と見る説などがありますが、明確な理由は分かりません。

(参考)

新旭町誌編さん委員会(1985)『新旭町誌』
p.184-198, 新旭町



▲川北に残る安曇地名（新旭町大字安井川）
【『新旭町誌』掲載図表を参考に、国土地理院 シームレス空中写真を加工】